一泉

発行所
〒921 金沢市泉野出町
3丁目10－10
金沢泉丘高等学校内
一泉同窓会
電話(0762)42－0211
定価　1部　100円
㈱橋本清文堂

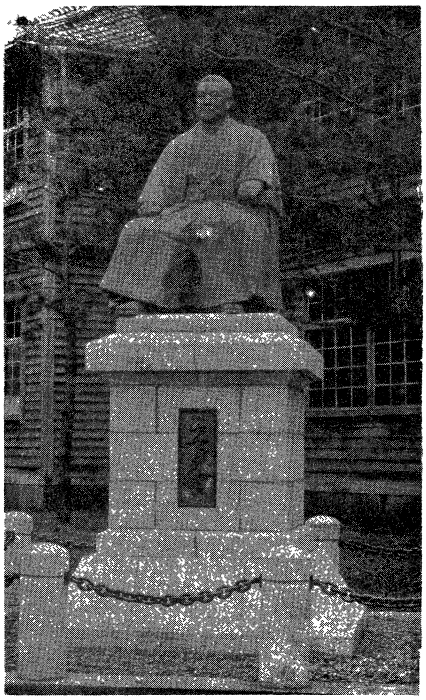
草創期の第三代校長
久田　督　先生

草創期の一中は、初代、野人的な富田輝象校長、それと対象的な、二代目野田藤馬校長とつづき、三代目の久田督校長は、その両面を兼ね具えた大型の人物であった。

金沢第一中学校は藩学の系譜を直接にひくものではないが、石川県における最古の県立中学校として藩末から明治初年にかけてめまぐるしい改廃を重ねた過渡期の藩立諸学校の伝統を吸収しており、草創期の校風の中には、士族的気風が濃厚に継承されていたと思われる。

久田校長は安政五年（一八五八）、加賀藩士久田守之の長子として生を受け、明倫堂に学ぶかたわら、家中の私塾に通い、士分としての基礎教養を身につけながら明治維新を迎えたのである。

その後、新設の藩立洋学校壮猶館に入り、十五才のとき、長崎の外国語学校（広運学校）に入学し、翌年東京外語に転じ、開成学校予科を経て、明治十四年（一八八一）帝国大学を首席で卒業したのであった。


旧本多町校庭の久田校長像

卒業と同時に、農商務省官僚の地位が約束されていたが、家庭の事情に依り、当時比較的高給であった教職に従事せざるを得なかったのである。

二十二年、三十二才の若さで福井の中学校長として招かれ、その後二十九年に、たびたび校長排斥騒動をおこし難校として有名であった三重県第一中学校に六代目校長として転じ、その後、はじめて、工業学校長として郷里石川の土を踏んだのである。

工業時代には、校長・教頭の減俸を代償にして校舎の新築を敢行した業績は有名である。

先生は、外面的にはつねに県人らしい限界をもった行動をとっていたが、内面には極めて激しい気魄をもっており、金沢士族の気骨を代表するに足る人物であった。

李家県知事の来校時の『ゲートル問答』が、先生の言行を示す代表的な一事件であった。

先生が、後の文部大臣中橋徳五郎氏の義弟にあたり、政界の有力者に知己も多かったが、県内の政治権力との接触をつとめて避け、教育と政界との悪縁を断ち切った事が、大校長としての名声を全うさせる一つの原因ともなったのである。

先生は十年に余る校長経歴によって培われた行政的手腕は、着任後は徐々に生徒定員の増加をはかり、後にその総数を八〇〇人に拡張するなどは、そのすぐれた手腕の一端を示すものといえよう。

先生には近代的な思想とは評価し難い側面があり、外人教師の国辱的な発言に憤激したと云う逸話や、三宅雪嶺・頭山満等と親交のあった点からみるに、国粋的傾向がかなり強かったように推測される。従って、その訓育には、かつての私塾的伝統をなお強く残していた。

又、きわめて包容力の豊かな人物であるとともに、生徒の訓育に細心の配慮を払う人柄でもあり、春風駘蕩たる温顔と寡黙ななかに深い意味をたたえた訓話が、生徒に強い感銘を与え、敬慕の対象となっていたが、大校長の風格のなかに、次第に近代教育の充実過程から取り残されつつある後進性がひそんでいたことを見のがせないのではなかろうか。

ちなみに、現校庭の左脇に

『厳霜烈日可畏而仰』

と記された『厳霜碑』の建立が、明治四十一年（一九〇八）に完成したのも久田校長の業績の一端として現在におよんでいるのである。

※一泉同窓会所蔵の文献参照。

「一泉」第六号によせて

泉丘校蔵書解題目録の編集を終えて（3）

CHUSHINGURA（忠臣蔵）

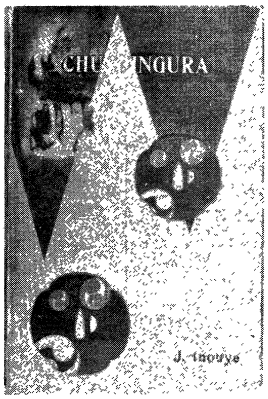
山森青硯

本書は欧文の忠臣蔵である。一寸変った書物であるが、蔵書印に「石川県立金沢第一中学校蔵書之章」とれっきとしたものがある。明治四十三年（一九一〇）東京中西屋書店発行、二六九頁、23×14.5cm中味は英文ばかりで、唯、挿絵が沢山あり、これで忠臣蔵であることが判る。

訳者は、当時一流英学者井上十吉氏である。十吉氏は大小幾種の井上英和辞典と井上和英辞典を編纂され、余りにも有名である。彼は文久二年（一八六二）十月徳島藩士として生れ、明治六年（一八七三）十二才（洋学編年史は十三才とある）の時藩命により英国に留学させられた。同15年帰朝、専攻は採鉱学であった。明治19年～26年迄第一高等学校に英文学を講じた。

明治31年（一八九八）外務省飜訳官としてベルギー公使館に在勤、後米国に転じた。其間本冊「忠臣蔵」英訳して、最も広く海外に紹介せられたのであった。晩年小笠原長生著「東郷大将伝」の英訳を脱稿し乍ら、上梓なく昭和四年四月七日病歿された。歳六十八。彼の最も喧伝されたるはこの「忠臣蔵」であった。日本、即（そく）忠臣蔵であるといっても過言であるまい。本書英訳上梓明治四十三年（一九一〇）は、日露役（米英の仲介により、米ポーツマスに於て講和す）後の我邦文物漸くかたまりたる時節であり、本書の発刊部数は未知であるが、万邦は競って本書の輸入に懸命したと云う。

太平洋戦争直後、我邦ポツダム宣言受諾の時、彼国は多く先の在日米大使グルー（GREW）の言を信じたと云うことであった。日本国民は皆忠臣蔵であると見たのであった。何十年経っても敵討をせにゃきかぬ国民である。此の思想を根底から覆すべきであると、マッカーサーに進言したのは本冊であった。爾来三十有余年、薬は効き過ぎて、全くの骨抜きになろうとは、彼氏も予測しなかったであろう。



扨井上十吉氏の訳本原本は「赤穂義人録」であったと云う。義人録の著者室鳩巣は後程幕府儒官となり、沢山の名著を残されたが、在金沢時代の著は、僅かに「明君家訓」と「赤穂義人録」の二著のみであった。鳩巣金沢に居て江戸の様子は判らなかった。元禄十五年（一七〇二）赤穂浪士復仇なった翌年、元禄十六年、鳩巣は加賀藩江戸詰藩士杉本義隣によって其詳細を知り、金沢居宅に於て脱稿したのであった。尚鳩巣門生小谷継成を広島浅野邸（前田家と親戚）に派遣して、細微な添削をなし義人録の完璧を期したのであった。

室鳩巣像

赤穂義人録　今から考えれば、何んでもない様であるが、当時としては大センセーションを起したと云えよう。

時の政府（徳川）に反駁する者を正とし、与党を邪とするのであるから、然かも外様雄藩加賀藩から狼煙が上ったからである。それかあらぬか、享保四年（一七一九）の赤城義臣伝（片島深淵編）は大きく御咎を受け、幕府公刊を禁止した。其他多くの書が発売禁止が命ぜられた（外骨筆禍史）。

どうしたことか、室鳩巣の義人録のみ御咎なく、天下を風靡尽した。然かも「英訳忠臣蔵」は日本の代名

詞となり、其震源地は金沢であったのである。筆者始めて此の「英訳CHUSHINGURA」（泉丘校本）を見たとき、紙碑（著書）による世界の感化力が、如何に膨大であるかを痛感したのであった。そして余りにも時代はずれしたNHKテレビ連載「峠の群像」が、今漸く時人に日本代名詞をとり返している様に思えてならぬのである。

参考文献

拙稿「室鳩巣金沢に於ける居宅跡の研究」（昭和43・12「北陸大学」所載

日本洋学編年史（大槻如電原著、佐藤栄七増訂）

瓜生順良氏の死を悼む

旧金沢一中大正十三年卒で関東一泉同窓会副会長の瓜生順良氏が四月十七日、ジン不全のため逝去されました。氏は人も知る宮内庁次長を約二十年間務め宇佐美前宮内庁長官を補佐し、皇室の〝番頭役〟を果たされた。昨年秋の関東一泉会の総会にも出席され、演台にて謡曲の一節を披露された元気な姿が強く印象に残り、ここにつつしんで哀悼の意を表します。

吉田一郎先輩を偲ぶ

堀　義雄（一中四十二回卒）

先般発行された一泉同窓会の会誌「一泉」第五号にも載った一中の大先輩の故吉田一郎氏には、本年一月上旬熱海の病院へお見舞に行きました。たまたま氏のお世話に来られた娘さん（といっても老年の方ですが）ともお会いしましたが、吉田氏は私に「堀君、俺が死んだら葬式に来てくれ」と言われました。その娘さんは「お父さんは珍しいね、大抵の人には、死んでも葬式に来なくていいよ、といっているんですよ」といわれました。帰路はその娘さんと一緒に東京へ帰って来ました。

そして大寒の折に亡くなられました。勿論私はお葬式に行って来ました。氏は私の彫刻に深い関心を寄せられていた。私にとっても貴重な人でした。残念でした。

82二紀会秀作展 悲しい女 堀 義雄

谷 恵吉郎先輩のこと

平石 英雄（一中四十一回卒）

谷恵吉郎氏は第二十回卒業の方で私が深く尊敬する先輩の一人です。

最近度々お手紙を頂戴し、その中には誠に貴重な示唆に富むお言葉があるのでお許しを得てその一、二をここに記すことにしました。

㈠　北陸には固有な風土に基づく根深い宗教心が昔から培われており、それを物語る代表が藤秀璻先輩の著作であると考えます。新しい科学技術を追求した私なども心の奥底のどこかに祖先から伝えられた仏心のかけらがあります。

㈡　私の同期の土田兵吾君は元陸軍少将で今次大戦では赫々たる武勲を建てた男ですが、二十年程前脳卒中で倒れ爾来半身不随ですが、精神力が極めて旺盛で左手で文章を記す事に成功し部下の事共、特にその功績を後世に書き残す事に努力しているのは、正に一中魂の権化とも云えましょう。

先日、同期の三須、蚊野の両君と土田君を訪問慰労し歓談の一時を楽しみ、

七十年の昔のまゝに咲く杜鵑花（きつ）

の一句をものしました。同期では三須、蚊野の両君と小生の三人だけが足腰達者です。

㈢　現在広く使用されているマイクロフォンの主要部の発明は、大正八年江口元太郎理学博士が海軍でなされた業績によるものですが、これを実際に知るのは現在では私一人という事になり、先日米国からの照会に対して適切な回答をした事を喜んでいる次第です。

㈣　この度学士会から記念の杖の授与を受けました。誠に名誉な事と思っています。

谷氏は満八十八歳ですが、日本に於ける無電工学界の古くからの泰斗のお一人で、今も尚矍鑠として学士会其他多くの公的機関に於て活躍され、ご経歴といい誠にご立派としか云い様のない方ですが、日常大変ご質素で而も極めて温和で慈愛深く、親不幸ばかり重ねた小生には慈父の再来の様な方に思われます。

同窓の随想

第二十一回卒業の面々

中堂観恵
（一中第二十一回卒）

この二十一回卒業生のうち、優秀な連中は殆ど四高医科にすすみ、それが四高在学中にバタバタと結核にやられてしまったのである。このごろ結核はそう恐ろしい病気でなくなったが、この時分は若いものの命とりの病気であった。わたしの懇意にしていた辻次吉君もその一人で、四高の医科から東大にすすみ、その卒業を目前にして病魔にやられてしまった。

彼の家は金沢から金石に行く途中の若宮にあり、大百姓で梨畑を沢山もっていたので、金石の海水浴の帰りなど立寄って梨の御馳走になったのである。彼は俳句を好み、一中在学中すでに一かどの宗匠気取りであったが、その点わたしもいささか相通ずるものがあったので懇意にしていたのである。

亡くなる前々年、わたしは横須賀の学校にいてすでに月給取りであった。丁度、冬休みになったので郷里に帰るべく東京に出、本郷の彼の下宿に一泊、一緒に金沢行きの汽車に乗った。途中このまま帰るのもつまらぬ、途中、富山の温泉に入ろうではないか、費用はわしがもつという ことで二、三日湯治して帰った。

その後、東京で逢ったとき、彼は「あのとき家に帰ったら母に泣かれた。どうしてまっすぐに帰らずに温泉なんかに行ったのか、顔色が悪いがどこか気分が悪いのではないか、という。母はこのときすでにわしの病気を感づいていたものとみえる」とわたしに語った。

彼は頭がよかったので、学校はさほど苦にならず、余暇に新聞の懸賞小説に応募していたりした。それが彼の命とりになったのであろう。

その後、わたしは外地勤務になり、彼と別れ別れになったが、その間に彼は自覚していた結核が、しだいにすすんで遂に不帰の客となってしまったのである。

二三年して休暇を得たので、彼の墓参に訪問すると、両親から涙ながらに彼の臨終の話を聞かされ、彼の手記というものを見せられた。それはときどきの句作、随想などを書きつらねたもので、表題は「往生録」といい、長い病床の記録で部厚いものであった。わたしはそれを借用してもちかえった。そのころわたしは海兵団の新兵分隊長で、結婚前、営内に独身生活をしていたので、これをくりかえし読み、そのうちのよいところを抜萃し、兵員に手伝わせてガリ版で刷り、用紙五十枚くらいのものにまとめ、表題を「辻次吉往生録」とし、二百部あまり刷り、同級生から一、二級上下の辻君と懇意にしていた人たちに配布したのであった。

七、八年前、又墓参りに訪れると、弟さんが家督を継いでおられ、家はむかしの百姓家ではなく、豪壮な土地成金の構えにかわっていて驚かされた。

いまごろ彼が生きていて医者になっていたら、森鷗外に近い異色の医者が出来ていたであろうと確信する。

つぎは羽咋郡出身の奥村潤一君である。わたしと同じ能登出身ということで一年のときからずっと懇意にしていた。休暇で帰るとき郷里の南大海村に立ちよって、大きな百姓家に二三日厄介になり、川へ行って鮎をとったり、附近を遊びまわったりしたものであった。

彼は家が山もちであったので、一中から盛岡高等農林に進み、卒業のときは断然頭角を現し首席であったとか。卒業後富山県庁に一年位つとめ、王子製紙へ入り、朝鮮の鴨緑江流域の現地勤務をやっていたときに社長に認められ、一躍本社の秘書に抜擢され、とんとん拍子に秘書課長になった。中学の同級生の某が採用せられて入社したが、あまりに異数の出世に同期生と思わず、

「わたしはあなたの弟さんと金沢一中で同級生でした」

といったという。

その三四年後が関東大震災であった。二度とない好機会ということで、社長が後援者となりここで独立、社名を角丸商店といい、日本橋に店をもつことになった。その頃わたしも横須賀の学校にいたので、ときどき店を訪ねたりしていた。

彼は朝早くから夜おそくまで、身体を張って事業に専念し、周囲の期待に背かないように、めきめきと業績をあげていった。

昭和二年、わたしが海軍大学に入ったころ一中の同期生もボツボツ東京に集り、クラス会を開こうというまでになった。ところが時期は不景気のドン底、クラス会を開くにも貧乏たらしい会合しか開けなかったが、奥村君は会費の足りないところはわしが受持つということで、いつも厄介になったものであった。

わたしは海軍大学を出ると、東京の赤煉瓦に勤めるようになったが、経済的に奥村君に面倒をかけることがしばしばであった。

奥村君に妹があり、彼はそれをわたしと結婚させようとしたが、家の人たちが、わたしが寺の出身であるところから

「寺の親戚になると、何かというときに寄付の筆頭にあげられる」

と賛成せず、結局金沢の士族の娘をもらったが、彼はそんなことには頓着せず、生涯兄弟同様のつきあいをしたのであった。

そのうち大東亜戦争となり、南方の島々を占領して行ったが、ニューギニアを占領し、そこの大森林のあるところが海軍の軍政地域ということになると、奥村君は何としてもこの軍政要員になると言う。わたしはマラリアの恐ろしいことを説いて、断念させようとするけれども、一向にひこうとせず、

「わしが戦地で死んだら、相続税がいらなくなる」と。

そんなことは冗談であったろうが、わたしが聞かないものだから、つてを求めて他人に頼み、海軍省に願書を出してしまった。

彼の肩書きは「海軍司政長官（勅任官）ニューギニア軍政部附」というのであった。

昭和十八年七月、彼が南方に行ってからまだ一年もたたぬうちにマラリアにかかり、頻死の重症で呉海軍病院に後送せられ、そこで息を引きとってしまった。

そのときわたしは軍令部から緬甸大使館附官に発令せられ、見舞うことも出来ず、後髪を引かれる思いで戦地に出発したが、幸い同じ二十一回卒業の佐藤賢了君が陸軍の軍務局長であったので、いろいろ面倒を見てくれ、海軍もまた将官の待遇をもって葬送を執行してくれたという。

彼の亡きあと、その事業は後継者よろしきを得、戦後りゅうりゅうと繁栄し、我国木材界に重きをなし、いま深川木場の一角に堂々たる「角丸ビル」が聳えている。かつて石川県の代表的企業であった安宅産業が、海外における事業の失敗から倒産するや、その木材部を引きとって、いまその再建に邁進している。

ソビエト紀行・今昔

斎藤季夫（一中第三十六回卒）

「杉森（久英）がソビエトへ往ってきたらしいから、最近のロシヤの様子を聞こうじゃないか」ということで、八月二十七日夕、新宿・小田急ハルク地階「大しま」で集ることにした。この割烹屋は加賀料理で売りこんでいる店のようだ。電話一本で集ってきたのは、伊藤素衛、岩野正隆、関堂可雄、村上四郎、釣谷武、土屋博靖、高柳日出臣、西川宗保、斎藤季夫の九名。

久し振りに顔をみせた伊藤君はこ数年来能面彫りに専念しているとか。無精ひげと称する顎髭を伸ばした風丰はみるからに「仙人」そのものだった。

杉本君のソビエト行は、先方の作家同盟の招待によるもので、同行幾人かの中で彼は団長格だったという。日程約四週間、横浜を船で三陸沖、津軽海峡を経てナホトカまで五十三時間、ナホトカからハバロフスクまで鉄路シベリヤ鉄道（支線）で十三時間、同地からモスクワまで空路六時間の行程だったという。

実は、小生も二十年前、ちょうど東京オリンピックの開かれる年の九月末、招かれて「世界」（岩波書店）の編集長ら三人で、ソビエトへ行ったことがある。このときも杉森君と同じ道すじを辿ったが、たしか船は五十四時間、汽車は十八時間、飛行機は九時間を要したと思う。二十年間の進歩としては、時間の短縮はすくないようだが、ただし今日では空路直行で十時間ぐらいでモスクワに着くはずだ。だが、急がない旅ならば、鈍行のほうが間違いなくずっと旅の気分を味わえる。シベリヤ大陸の初秋の風情は、とても北海道・十勝原野の比ではない。途中駅といっても、駅舎らしいものもなく、まるで無人の停車場が多かった。それでも、村人というか、とりわけ子供たちがたくさん集ってきて、しきりと物珍らしげに列車を眺めている風景は、往時の日本の状景とあまり変わりなかったが、杉森君によるとこれは今日でも大差ないようだ。

杉森君の話は、本職の文学というよりも、作家の目を通してのソビエト国民の生活状態、政治・社会的関心について多くを語った。これは当日集ったわれわれの気持を考えてのことかもしれない。

ロシヤ民族はじめ数多い民族たちはいずれもジョークを好むらしい。歓迎の挨拶の後は、必ずといっていいほど、人の心を抉るような世相風刺的なジョークやアネクドートで結ぶことが多い。ときにはお色気たっぷりであることもあった。聞きながら「おやっ、そんなことまで言っていいのかしら……」と、杉森君が首をかしげる場面も稀でなかったという。鉾先きは、はるか彼方に住むお偉ら方にむけられているようにもとれたという。ずばりいえば、体制批判にもなりかねないことを平気で、多勢を前にして、しかも異国人歓迎の宴で言ってのけるという。格子なき牢獄とか、息の詰まる国とか、一

枚岩の国とか聞かされていた同君には、とても意外だったらしい。しかし、裏を返すと、それだけ心のゆとりがあるのかもしれない。「大東亜戦争」時代を生きてきた小生には、あの頃のしめつけられるような圧迫から気軽に口も開くことのできなかったことを思い起した。

食生活はじめ一般の暮らし振りは、二十年前にくらべて、意外なほどに乏しく粗末なようだ。ホテルなどでも、キャビアはおろか、ハムなども至極すくなかったようだ。アイスクリームを買うために長蛇の列が出来ていたなどというと、今の日本ではとても考えられない風景といえる。

モスクワ在住の某大新聞支局長の話だと、たしかにここ三年つづきの「不作」のためにかなりの痛手を蒙っているらしいという。それにしても、今の日本は食糧をはじめすべてが天国のように贅沢だ。これを何んと理解したらいいのか、果して手放しで喜んでいいのだろうか。

朝と夕　勝どき橋で涼味かな　南海

三須武男（一中二十回卒）

（日本食糧倉庫）

じょんじょこ

青戸泰賢

（一中第三十八回卒）

その頃――といっても昭和の初頭だが、下菊橋をくぐる瀬は広かった。

それは野田の崖下に添うて下りつつ、磧をひとまたぎして絞られると、川岸町の石垣にぶつかって奔流する。井桁枠の石組が、長い堤防の裾に置かれて、流れの衝撃を喰いとめていた。えぐられた細い深みに、水浴びの喚声がどよもすのは、学校の夏休みを待つまでもない。

流れはやがて巾広い浅瀬となって桜橋をくぐると、また対岸の寺町下で蛇篭に堰かれて川底を掘り下げる。ここにも井桁枠の石組が敷かれ、流れを澱ませて、第二の水浴場を造っていた。

川水は、再びゆるやかに磧に乗り上げてゆく。対岸に押し渡ったとみるや、十三間町の川岸に荒瀬をぶつけるのだ。

大橋の両岸は、もう狭い。たゆとう水はかき舟を浮かせながら、狭い川巾一杯にみなぎり立つ。深い流れで、禁漁区をかこいこみ、無数の魚影を湧き立たせていた。

じょんじょこの遊び場は、絶えずこの三つの橋の間にあった。蛇行する流れに置き去られた石の磧が、恰好の場所となる。

どの磧にも、川石の下には流れが浅く伏せこまれていて、ふとした窪みや、草の根方から水がにじみ、寄り集っては、いつしか小さな流れを造り出す。

その水流を川と見立てての築堤や、滝造り、池を掘り拡げて小魚を泳がせたりもした。

倦くことを知らない小さな土木工事だったが、川の懐では明日までもたないはかなさがある。終りには、溝でひいた本流の水をドッと落し、大洪水と見立てた破壊が行なわれた。その潰滅の惨状に、また新たな喚声を上げたものである。

井上君と知り合ったのも、じょんじょこでのことであった。大工町の外科医の息。まだ小学校の頃であったが、中へ進むと、じょんじょこの工作も次第に大がかりになってゆく。

井上君は、ひとかかえもある角石や、腕よりも太い流木を拾ってきては、ダム造りに没頭した。護岸の石組に粘土を塗り固めて、水勢に耐える強度を実験したりもした。

水力発電の水車に、ペルトン、カプラン、タービン等の種類のあることを教えられたのも、その頃のことである。ダムを迂廻する魚梯の傾斜角に、一理論をひらめかしたりして人を驚かせたりもした。

井上君は、水力発電の技師を目ざして、終生の夢を描いていた。「その肌ざわり」、「その香」と、いつもいっていたように、水に憑かれた男の執念であったのかも知れない。

そんな勉強家だった井上君も、運つたなく四高の受験に失敗した。二浪目を迎えた年の夏、こともあろうに睡眠薬で自殺して相果てた。

あれから早くも五十年がたってしまった。

犀川はあくまで静かなたたずまいである。悠久の流れはなお尽きせぬが、じょんじょこの磧は、いまもうない。

（在東京）

句集「落葉」より

山田武治（一中十八回卒）

母の曲淡くなつかし春の宴

駐車場にはさまれて菜の花畑

たんぽゝの舗装を割って咲き出でし

貧血に雨の重たし松の花

夏となる朝毎に啼く土鳩かな

ひからびて蕊に残るや花つゝじ

心通う連帯の絆（きずな）

（厳霜烈日編集余録）

一中四十六期
村井　又兵衛

これからをどう生きるかということはいかに死ぬかということなのだが、このことが妙に実感として心に重くのしかかってくる昨今、正に知命の齢に達したものだとしみじみ感じる。自分のやってきたことや考え方を文字にして本を創って遺そうなどという発想も、いろいろ苦労して世の辛酸をなめた我々位の年令に達して始めて起きるものであって、同窓の同期諸兄夫々皆書きたいネタはいくらかはあるだろう。つまり材料さえあれば事実や経験を書けば、いくら筆不精の人でも原稿用紙の何行かはうめてくれるだろうと考えたわけである。

四十六期に呼びかけて我々の本を創ろうと坂木君がいい出した時、自分一人でも何か遺したいと考えていた所だったので私は一も二もなく賛成した。しかし先立つものの何とやらで、赤字にだけはしたくないと考えて、資金面での援助をとりつけるために前もって金沢の内田君に相談した。内田君は快く協力を約束してくれたが、三つばかり条件をつけられた様に思う。その一つは人に見せても自慢出来る立派な本を創ること、二に単なる少年時代の青春回想記に終らせないで、激動の戦中戦後を闘いぬいた各人の生き態（ざま）や処生訓、これからの抱負等広範囲に書かせる様訴えること。三つに財源のために広告をとる等して本の品位を落さない様強調された。全く卓見というべきでこれら三点は企画編集に要した四年間、東の間も私の脳裡から離れることがなかった。

一人当りの投稿枚数の基準をどの位にすればよいか、原稿が集まるだろうか、頁数は何頁位になるか、どんな体裁にして何冊刷るべきだろうか、製作原価はどの位に抑えられるか、全くどの一つをとってみても何ひとつ自信のもてないものを一応の目算をたてて見切発車をするわけであるから、相当の決断を要したことは論をまたない。赤字にだけはしないと財源を保証してくれた内田君の温情ある激励と、印刷製本を誠意を以て引受けてくれた宝印刷の堆会長に対する信頼感が終始私を支えてくれた強い力であった。堆氏は四期予備学生の同期の桜である。

昭和五十三年六月一日、東京日吉坂下の八芳園で開かれた同期在京一中会に金沢から内田君と青梅君に上京してもらい、その席で私から二百五十頁、四百字詰原稿用紙四乃至六枚、予算三百万円乃至三百五十万円を提案採択され、昭和五十四年金沢で行われた四十周年記念総会で正式決議となり、内田君を会長、石野君や金谷君を副会長とする記念事業会を発足させて還暦記念文集刊行事業がスタートしたのであった。

出来上りが本篇四百頁、別刷百五十頁の二部作となり、予算以内で五百冊完成したのであるから満足すべき成果であったと思う。生存中と思われる同期生百三十五名の中、賛助寄附金を支払ったもの約百名、原稿投稿者八十名という結果も、還暦記念文集としては同期生の約九〇％の協力を得られたことであり、まずまずの成果であったというべきであろう。

本の配布は最近になって一段落した様であるが、よくこれだけの本が出来たと先輩知友はもとより見ず知らずの人からも手紙を頂いたり電話で会見を申し込まれたりで、反響の以外に大きいことに感動しています。杉田君にたのんで坂本三十次代議士を通じ国会図書館にも寄贈したが、内田君の先見の明というか広告をとらなかったことが、採用されるに当っての大きな要因の一つとなったことは事実である。

金沢の梅林君から、こんな立派な本になるとは思わなかったので、以前新聞のコラムに投稿したものをそのまま転載したのだが、同期諸兄の立派な力作揃いに比べて自分の熱意の不足していたことを恥じる意味の懇切なあやまりの手紙を頂き、尾越君の未亡人からは、尾越君が会社の仕事に逐われるあまり執筆の余裕が全くなかったことが、かえすがえすも悔まれてならないとの痛恨の御便りを頂いたりで、私としては同期諸兄に対し一人でも多くの原稿を勧誘する努力に今一つうらみなかりしかと後悔したことであった。

太田君の努力で西村精一先生から巻頭を飾る特別寄稿を頂いたが、これが思いもかけず先生の遺稿となってしまった。先生と我々の奇しき縁といったものが感じられてならない。息を引きとられるまで本を枕頭から離されなかったともうかがって感慨ひとしおである。

四十六期還暦記念文集「厳霜烈日」は正に齢六十を過ぎても尚若々しい心の通う同期生の精根傾けた努力の集大成であり、喜びにつけ悲しみにつけこれをひもといてお互を慰め合う連帯の絆として永くうけつがれて行くだろう。

坂木君は本が出来上るのを待って

いたかの様に、健康の為に東京の俗塵を離れて長野にひきこもってしまった。山川を跋渉して絵を描き、月に一回上京して納賀君の診療を受け、私の事務所に立ち寄って旧交を温めつつ豆腐で共に杯をささやかにかたむけるのが月例の楽しみとなってしまった。「淋しい時はよくこの本を開くのだが、何度読んでもいいなあー」という彼の言葉にしみじみとした哀感がこもっている。

これからどう生きるか、どう死ぬか、我々の厳霜烈日の闘いはまさに始まっているのである。

再会三十年

寺井俊二（泉丘四回卒）

卒業三十年の記念大会に百六十人ほど集った。同期生は四百人くらいかと記憶するから半数に近い盛況である。忽卒三十年、再会ただ言葉もなし。

同窓会名簿をみれば物故者も少なくまだ二十名を数えない。元気で活躍中の旧友多数あることはうれしい。戦争がなく経済、社会の発展の時代の賜であろうか。

三十余年の昔は泉丘の創世の日々であり、金沢一中の終息の日々であった。終戦の翌春に入学した金沢一中は、翌年から募集を停止し二年修了時で廃校となる。金沢市工の併設中に一年をすごして、新しく発足する泉丘の第一回の一年生として来てみれば、過ぐる一年間の破壊に跡をとどめぬ窓、戸や机などの残骸の山に金沢一中時代の諸先生の顔はほとんどなかった。小学区制が施行されて、高校進学時に他校へ移った者も多く、逆に他校から移って来た者もあった。戦後のきびしい世状に高校進学をあきらめた者もあったと聞く。一中に入学し、泉丘に在学したことが歴史の宿命とも感じられる。

「過去との断絶」を絶対方針として占領下に発足した高校のこととて、六十年の歴史の中で初めて受入れる女性徒に、中庭に急ぎつくられた木造のトイレが、その後数年は存続したと記憶する。歩んだコースは異っても同期生はみな同じような激変の波をくぐっているはずである。

軍事教練こそなかったが、登下校時に校門から講堂の旧奉安殿に一礼し、上級生には敬礼、異性交友が謹慎処分であった教育から、制服制帽なし、男女共学、学校批判自由次第、外部から各種の政治思想が校内に吹きこむという百八十度の転換に、ただ茫然とした思い出の数々。

普通科があった。商業科があった。家庭科もあった。自由放埒、趣味耽溺、勉学専念、体育没入さまざまの青春が渦巻いていた。生徒会が地道な活動を志向し、制服がきまり、校歌がつくられ、校旗が樹立されて、みるみるうちに新しい校風がつくられていったのも、営々と培われた一中以来の伝統の力によるところが大きい。三鷹、下山、松川事件から朝鮮戦争を経て講和条約へ、泉丘在学の三年間に世界は大きく転換し、世間も落ちつきをとりもどしていった時期でもあった。

その後、中学区制の普通科単独高校となった母校の金沢一中、泉丘を通じて百年に近い歴史の中で、おそらくは最大の変革の中に過した青春の泉野原頭は、同期生の中に他に比べようもない大きなものをのこしているはずである。三十年を顧みて母校の歴史の中に自らを見出すとき、金沢一中と泉丘を知る生粋の泉丘の元年生として、まだまだ母校になすべきことの多きに思いを致さずには居られない。

卒業してからの日々は日本の経済成長とまさに軌を一にした三十年であった。自分ではあの頃と変らないつもりなので、五十才などというのは別世界のことと思っているし、十年一昔を三回、石の上にも三年を十回くり返したのだと云われても、そろそろ孫のできた同期生があると聞いてもさっぱり実感がないのだが、何かしら動かし難い変化が静かに内に積み重なってゆくのを感じる昨今でもある。五十路を目前にした今、多くの同期生を一堂に集めるものは、あの多様で変化に満ちた青春なのであろうか。同期の諸兄姉の一層の健康と発展を祈るや切。

再会三十年。ただ言葉もなし。

第十回桜美会記念美術展開催予告

来る十月七日より十月十二日に至る間、片町大和文化ホールにて、第十回美術展を開催致します。尚この間、十月九日土曜午後六時大和七階大食堂にて十周年祝賀パーティを開催する予定であります。

尚十周年記念行事として、母校三十三回卒（大正十五年）の郷土史家山森青硯氏の「郷土に於ける初期洋画の研究」を記念出版し会員に配布することになっています。

一泉桜美会事務局長　斎藤弥吉

想い出

知切則子
（通信制第十一回卒）

肩に重くのしかかった荷物を背負っての9年間。あれ程、荷物からの解放を焦がれてきた日々。いよいよお別れのときが来たあの時のホッとした気持と、なんともいえない寂寥感、両方を私は忘れることが出来ません。

私の入学は34年。長男が生まれる一年前の事でした。せめて、この子が入学するまでに卒業をと願っていたのですが、小2のときにやっと卒業にこぎつけたのでした。それも、本校・協力校の諸先生方、同窓の仲間の熱い支えがあったればこそ、させてもらったのだと、今もって感謝の気持ちで一杯です。

七尾・鹿島地区では協力校でお世話になった堀岡先生を囲んで、ささやかな同窓会が時折開かれます。環境も年令もさまざまだけれど、共通の体験をわけ合ったもの同志の心安さとでもいうのでしょうか、とっても楽しいひとときです。今は高校長でご活躍の先生にマンツーマンで教えを受けるしあわせを享受出来たのも、通教生なったればこそよと、いばってみたりします。

私は仕事で金沢へ出ることがしばしばあります。先日も、久しぶりで、スクーリングのとき、よく利用した6時半の汽車に乗りました。あの当時、早朝のこの列車は、かつぎのおじさん、おばさんでいっぱいでした。私はちょっと気恥かしい思いで、高校の教科書を開いて、予習復習にあてる貴重な二時間でした。今はかつぎの人達もぐーんと減った感じでした。そして、帰りは4時半の汽車に飛び乗るようにして帰るのでした。

或る時、泉ヶ丘の正門脇のバス停で、バスの扉がしまり、正に動き出そうとするところを、息せき切って走ってきた私を見つけて、小西正保先生が、ドアをドンドン叩いて、乗せてくださった。小西先生はご出張先の東京で交通事故でお亡くなりになられたとか、私はうかがって茫然といたしました。心からご冥福をお祈りいたします。

ふりかえって見れば、私の通教生活は、胸のあつくなる嬉しい思い出に満ちているようです。重い荷物とばかり感じていた一方で、その荷をときほぐすための努力の日々を、私はほんとうは好いてもいたもののようです。

一泉短歌

西ドイツ旅情

赤井直恭
（一中三十二回卒）

ライン河畔

雨と散る黄葉の道をたどりつつライン河畔の冬をたのしふ（56・11）

おとに聞くここローレライの丘静かなり枯葉の下に茸むれおゆ（同）

ローデンブルグの町

中世の城あとにたち仰ぎみる冬月寒し故国ははるか（同）

城壁の冷たき石にふれてみるこの感傷も捨てがたきかな

ハイデルベルグ四首

大学の暗き廊下を横ぎりて明治のころの先覚しのぶ

若人の熱気こもれるこの酒場 will-kommen の声もうれしく

白髪の老ピアニスト熱こめてスキヤキソングをかなでくれたり

この国のワインはうまし鷗外の恋人に似る女もはべりて（同）

同窓先輩よりの著書のご寄贈

今春より引き続き同窓先輩の方々から、その著書のご寄贈をいただきました。

この貴重な本をもとに将来の一泉文庫を計画し、広く同窓一般の人々に公開したいと念じて居ります。ご寄贈いただいた方に厚くお礼を申し上げます。

○赤井直恭氏（三十二回）
現代マスコミ文章論

○山田武治氏（十八回）
句集〝落葉〟

○坂野雄一氏（五十四回）
良寛に和す（良寛詩抄訳並に刻）

○南　秀男氏（四十一回）
藤　秀璨選集（歎異抄講議）
藤　秀璨選集（歌集）
慶応義塾々員名簿
（昭和五十二年版）

○中堂観恵氏（二十一回）
現地踏査　邪馬台国

○横川敬雄（五十二回）
教育は語り継ぐ
（中村禎雄の生涯）

同窓の集い

◇二十回生の語らい

関東在住の大正二年卒の二十回生も年々に減少し、現在健在を確認し得た同期生は九名を数えることとなった。

去る五月三十日、同期の三須、蚊野、谷の三名が打ち揃って町田市の土田兵吾君の彼の自宅を訪問した。

久し振りの歓談に時の過ぎるのも忘れての半日で懐旧談に華が咲いた。思えば一中卒業以来七十年を経て今日に至り、互いの健康を喜こびあった。

写真はその時のもので、右から三須、谷、土田、蚊野の諸氏。

（谷　恵吉郎記）

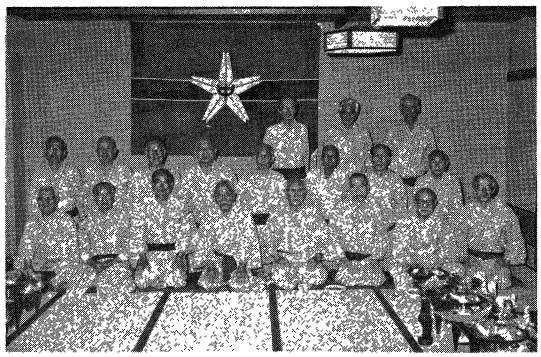
◇一中32期生（大正14年卒）全国大会

前年和倉での大会解散に当り、次回は関西で開くこととし、幹事を和歌山の田辺太郎、芦屋の竹田喜久三両君に願うことに衆議一決したのであった。その後両君の協議により、場所は紀州白浜温泉、白良荘グランドホテル、期日は五十七年五月十五、十六日と決った。

四月に入って出席確認の照会をした時点では二十一名参加であったが、体調を崩して急拠取消しが二名あって、結局十九名の参集で聊か淋しかった。

当日は天候に恵まれ、五月晴れの爽かな新緑の紀州路、風光を賞で午ら南下し、四時過ぎには全員指定ホテルに参集した。白良浜を眼下に見る高層ホテルの温泉で一浴、旅の疲れをとって六時より総会に入った。先ず桜章校旗を背に記念写真を撮った。何れ劣らぬ白髪禿頭である。宜なる哉。卒業以来五七年、明治・大正・昭和の三代を生き抜いた喜寿に近い者共ばかりである。

地元幹事として田辺太郎君（和歌山市で眼科医開業）の開会の辞に併せ歓迎の挨拶があった。続いて吉田常任幹事より一年間の経過報告と会計報告があり、五六年中に他界された級友六名の冥福を祈る辞があって開宴となる。乾杯は抽籤で決めた座席が床の間正面であった長尾四郎君（宝塚市良元診療所医師）の音頭であった。今回は毎回参加の常連十名が、色々の都合で欠席され一寸淋しい思いがしたが、代りに前記長尾君と、名古屋より宮川正澄君（日本無菌生物研究所の癌の権威者）の二名が初参加されて、宴は大いにはずみ杯を重ねるにつれて、メートルが上がった。両君共、少年時代の面影は容易に浮ばなかったが、話が一中の腕白時代に及ぶと、六十年のタイムトンネルを一気に馳け抜ける思いがした。芸妓のお時間も延長され、カラオケも出て「老童未だ衰えず」の意気を示したが、九時となって校歌を唱い、一応お開きになった。更に部屋に戻って水割りを傾けて夜の更けるまで懐旧談を続けた数名があった。



翌朝は八時に朝食。明年は全国大会を休止し、北陸、関東、関西で夫々の地区会を開いて親交を続け、昭和五九年は母校改築完成祝賀と創立九十周年記念行事が行れるのを機会に、金沢で盛大に全国大会を催すことを申合せた。この間に裏千家宗匠の大島勝比古君が、わざわざ金沢より持参された茶道具でたてられた一服のお点前を、次々一同にすすめられて感激した。

かくて九時半宿舎にて解散。白浜海岸の千畳敷、三段壁洞窟などの奇勝を始め、田辺湾クルーズ、南方熊楠記念館など思い思いの観光を堪能して、随時大阪に出て夫々の家路についた。

別れの言葉は一様に「達者でなあ……」というのも年齢のせいだと痛感された。

次に出席者を列記してその健在をお伝えする。

関東　泉谷弥一、柴田喬、中村一郎、松林幸雄、**北陸**　浅香勇吉、石田国太郎、大島勝比古、大島勇政、可長乙吉、清水弘、新谷桂三、富沢友治、又野政次、松井清忠、吉田直茂、**関西中京**　竹田喜久三、田辺太郎、長尾四郎、宮川正澄

（吉田直茂記）

◇一中三十三回信州大会

快晴に恵まれた風薫る五月、二十三、二十四の両日、その昔一茶がよく遊んだと云われる下山田温泉山田館で一年振りの全国大会が行われた。

二十三日午後二時過ぎ、関東・関西及び地元からの総勢二十七名が、長野電鉄小布施駅に小出(旧姓檀原)君の出迎えを受け、直ちにバスで北斎館を見学の後投宿。

一浴後六時総会、世話人小出君の挨拶の後、近藤君からは関東、藤田からは地元の状況報告あり、更に井口君から来年は関西の石田君が引受けると連絡があった旨報告あり。

宴に移るや、いずれも元気発溂、飲む程に酔う程に、唄あり踊りあり で、壮者を凌ぐありさま。流石は明治生れと自負する者あり。最後は例の如く校歌の高唱。ダウンする者数名を除いて二十名近くの者が、更に別室で杯を重ね、深更に至るまで懐旧談に花を咲かせる。

翌朝は年寄の目ざとさか、早くから起き出でて昔ながらの総湯に浸る者、峡谷の霊気を満喫して散策する者等々……。

八時過ぎ再びバスで一茶ゆかりの家、福島正則居城跡、川中島古戦場等を見学して車は一路西進、戸隠バードラインで野鳥の囀を聞く。戸隠奥社一の大鳥居近くの茶店でほんものの信州名物手打そばを十二分に賞味する。少憩の後、再びバードラインを下って善光寺に参詣。小出君の労を謝すると共に来年を約して長野駅で解散した。

(藤田記)

◇一中36期生の集い〝京に遊ぶ〟

一中36期生本年度総会は、関西在住者が世話人となり、六月七・八日、京都左京区南禅寺畔の「菊水」で開催。各地から馳せ参じたのは二十名。

このほか、世話人の一人村本進午君(京都在住)が前日になって病に倒れ、また杉森久英・矢田富雄君がいずれも急用のため参加できなかったのは残念でした。

京でも指折りの旅館だけあって、料理と酒のうまさは格別であったが、とりわけ湧水を隅なく配した回遊式池泉と、目にも爽やかな苔の緑など目の鱗を心ゆくまで洗い流してくれた。翌くる日、朝食前の運動をかねて三々伍々近くの南禅寺境内に歩を運んだ連中も多かった。

次の集りは、黒部渓谷探勝ということで、その面倒の一切を富山在住の和泉君にお願いすることで同君の快諾を得た。また楽しからずや。

(斎藤報)

◇一中三九期(七桜会)だより

昨年卒業50周年大会を盛大に開催してからもう一ヶ年……去る九月四日本多町県職員会館で地元同期七桜会の会合をもつ。この一年の間に八尾虎一、浅野宗次両兄が黄泉の旅にたって行った。昨年の大会では愉快に元気に一夜を共にしたあの友の姿が思い出され、往時を偲び心から一同で冥福を祈る。

先般の長崎の大水害で竹下六都夫兄の近隣まで崖くずれあり避難して居られたが、大した被害もなき由にてやれやれと一安心。

一方消息不明であった沢田他計雄兄が南米サンパウロで活躍の様子、又二年から四年まで一緒だった沖忠良兄の住所が判り本日出席され懐かしさで一杯であった。当日集った十七名の学友一同今日ここに元気に再会出来た幸せを語り楽しい一時を過ごした。

当日は①母校創立90周年記念行事②同窓会名簿の整理等について語り合い、来るべき59年10月15日の創立記念日には我々七桜会同期も全国から参加し再び本多ヶ森で再会しようと全員意見一致した。その日まで七桜会諸兄お元気で自重自愛を祈ります。

同窓会本部へのご協力

同窓会本部の活動資金として左記の方々から夫々ご協力金をいただきました。

ここに厚くお礼を申し上げます。

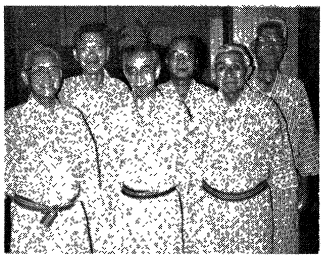
平松　昌司氏(昭和十七年卒)
堀　義雄氏(昭和十年卒)
中堂　観恵氏(大正三年卒)
関西八泉会　(昭和三十一年卒)

◇関西金沢一中43回同窓会

二月に会合した折、小生等の金沢一中時代には修学旅行が廃止されており残念だったので、修学旅行のつもりで小豆島一泊旅行実施を決めた。七月十日午後大阪駅に集合し姫路に参り、長岡氏の世話で関西急行フェリーを利用して福岡港に渡り、北中氏世話のダイヤモンドクラブ小豆島荘で一泊した。乾杯の連続で深夜迄愉快に歓談し、卒業以来47年の時の経過も忘れた楽しき旅であった。翌朝は観光バスで雨中の小豆島巡りをしましたら、給水制限寸前の島は何十日振りかの雨で島民は大喜びで、一同は良き雨男の役を果した形となった。全員出席の予定であったが、出張や法事、病気等で前田・真館・上田・水上の四人が参加出来ず残念であった。

参加者　加茂野茂、中村於外男、中川憲治、竹内豊八、北中善雄、長岡寛厚

（長岡記）



◇一中四十六期

勉強クラス会第2弾!!

卒業四十周年記念文集「厳霜烈日」上梓の余韻いまだ醒めやらぬ三月十三日(土)「金沢国際ホテル」に於て、有志勉強クラス会を開催した。

46回は早春、北陸地区居住者を主とした有志クラス会、秋には全国を対象とした年度クラス会と、年二回クラス会開催をペースとしているが、今度はまた勉強会にした次第。

当日の演題は「文づくりの苦労について」。講師は記念文集編集を一手にひきうけてくれた「村井又兵衛君」。

原稿集め、資料収集、資金準備から編集・校正の苦労話。出席クラスメート全員が一口乗っているだけに共感ひとしおの内容であった。

この勉強クラス会は、55年に「道づくり」と題し講師「吉田喜市君」で実施したものに引続く第2弾であった。

その後の懇親会には文集寄贈先からの思いがけぬ反響など語られ、クラス会殆んど全員で完成した立派な記念文集発刊に、還暦を迎えたアンビシャスボーイ達はまた新たな感激にひたったのでした。

尚46回は本年度クラス会を九月十一日(土)開催する。

（太田記）

◇一中四十九期卒業四十周年大会

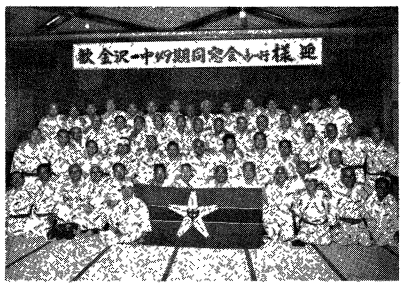
「山中や菊も手折らじ湯の匂ひ」

あこがれの金沢一中に入学するやその年昭和十二年七月七日日華事変がはじまり、本多が森より現在の泉が丘に移転、五年生になるや太平洋戦争がはじまり、戦争一色に塗られた青春が、私達四十九期生である。

われわれは卒業四十周年記念懇親会を八月十五日、山中温泉鹿泉閣に於て盛大に挙行した。

県外よりの遠来の友二十名、又四十年振りに再会した者十二名、恩師の宮沢外与治先生を迎え五十七名が参集した。

三時に集合し、物故者を偲び、先生の御言葉そして役員の挨拶と続き、小憩の後、六時より写真を撮り、かつての応援団長浅村一二氏（現石川県米専務）が静かに三、三、七の指揮を取り、ついで故英氏につぐ同窓会の名物男になったキスカの生き残り小川忠男氏（一泉同窓会副会長）がオールメイク、三、三、七拍子の音頭を身振おかしく指揮したところ、ただちに紅顔の美少年の日にもどり一糸みだれず一中スピリットを爆発させれば、感激した今は大学教授も踊り狂う場面もあった。



エピソードを紹介すれば、宴たけなわの頃、めの先きは何方ですか、と云われた老顔の旧友や、宮沢先生より長生きの〝コツ〟を聞いたぞと喜ぶもの、「おまん誰や」と変り果てた四十年のむかしの顔を思い出せない者、又若くして死したボート部員の墓参の相談をする者、又東京の一泉同窓会の女性役員より四十九期の記念誌を土産にたのまれたから一冊くれと申し出る者、わしの作文が出ているが書いた覚えはないと云う者、はてはプライベートの支払を忘れて帰る者、一晩語りそして飲み、夜を徹した旧友も五名以上あったとか。

来るべき卒後四十五、五十周年に又元気な顔をみせようと誓い合ってわかれた。

記念品(1)風雪四十年記念誌一〇〇頁。
(2)金メッキネクタイピン（金クサリ付）
(3)医王山に桜章をあしらった手拭い

（斎藤弥吉記）

◇一中五十四期東京会

五月十四日㈮夜、東京青山ダイヤモンドホールにて、五十四期（昭和21年修卒、22年修卒）の東京クラス会を開催した。金沢より高堀勝喜先生（歴史）、在京の氷田作治先生（書道）のお二人を迎え、学会にて上京中の柚木学君（関西学院大卒教授）を囲み、同君の今年度の日本学士院賞受賞を祝った。開会に先立ち、柚木君より受賞研究である日本近世海運史につき、約三十分間講義があった。また、去る三月二十一日、新潟でお亡くなりになった小林隆先生（国語）、同じく三月三十一日、千葉でお亡くなりになった長谷川秀治先生（国語）の二先生のご冥福を祈り黙禱を捧げた。新潟在住の小林和夫君より「カラスの死」と題する小林先生のデスマスクのスケッチが送られてきたので披露された。高堀・氷田両先生よりお元気なご心境のお話があった。戦中・戦後の激動期にほとんど勉強する時間のなかったわが同期生中より、柚木君が学者最高の栄誉に輝いたことは、近来の快事であり、吉野・小林・長谷川の諸先生を近年相ついで失った私共にとって、心の晴れる思いであった。（宮川記）

◇一中54期・同期会
東京と京都で開催

54期会では、ことし日本学士院賞を受けた柚木学（関学大経済学部教授）氏を囲んで、東京と京都で同期会を開催した。

東京大会は五月十四日、青山ダイヤモンドホールで、恩師の高堀勝喜先生、氷田作治先生をお迎えして行われ、関西大会は六月二十七日、京都先斗町「ますだ」で、山田善一氏（京大工学部教授）の音頭とりで開かれた。柚木氏の受賞研究テーマは「日本近世海運史」であった。（朱木会）

◇泉丘高校第四期生
卒業三十周年記念事業

戦後の学制改革で泉丘高校が発足した。その年に一年に入学した泉丘元年生たちも卒業して三十年。生粋の泉丘生第一号でありながら第四期生というのは、金沢一高から数えてのことである。

青少年期に戦後の混乱期を経過し、社会の大変革にもまれた中で、新しい校風の創生を体験した世代には中学高校六年間の印象は一きわ深い。同期生も五十に手のとどく年代となり、クラスやグループの集りは数多いが、同期生全体での最高最大の記念行事は、今の時期をおいてはないと、卒業三十周年記念行事を企画し、宮下明委員長、吉田正剛代表幹事のもと同期生協力して準備一年半。数々の行事を行った。

(1) 卒業三十周年記念大会

昭和五十七年八月二十二日㈰、山代温泉ホテル百万石で開催した。元校長の山本先生はじめ恩師十九名の出席をいただき、全国から集う者男子八九名、女子六三名、総勢一七一名の盛会であった。校歌に泉野の校舎を彷彿とし、物故者慰霊に亡き恩師旧友を偲び、記念撮影のあと懇親会に時のたつのを忘れた。新学制の発足で、男子、女子、普通、商業、家庭と文字通りバラエティに富み、先生方をてこずらせて「君らの時代は個性的だった」と云わしめた面々が、三十年の思い出を語り合うにはあまりに短いひとときに名残りを惜しみつつ二十三日朝解散した。なお大会に先だちゴルフコンペが二十二日午前七時から片山津ゴルフ場西コースで行われた。

(2) 記念誌・名簿「柏泉」の発行

同期生名簿と恩師近況、母校讃歌、往時の回想、同期生近況、各地の支部（？）だよりなどをまとめた記念誌「柏泉」を発行し大会当日に配布した。大会不参加者には後日郵送し、同期生全員に配布予定である。往時のなつかしい写真も多数掲載されている。

(3) 母校への記念品贈呈

いろいろな案もあったが、母校の意向もうかがい、新講堂の緞帳の一部として金三十万円を贈呈することについて、大会の席上で賛同を得た。

（寺井俊二記）

◇関西八泉会第三回の「集い」

京都四条通り鴨川をはさんで南座と対座する東華菜館にて、関西在住泉八回生の第三回の「集い」が四月十一日開催された。

三回目ともなれば余分の挨拶も必要なく、会の始まりから明るい談笑で終始。歓談は尽きることなくその儘二次会の祇園へと移動、夜遅くまで益々の友誼を深め合った。

尚、関西八泉会へ岡山県より新しく一名、途中転校者一名が加わり、当会の同窓生計四十八名となる。次回は十一月大阪にて開催予定。

（山本記）

◇泉丘十期同窓会総会

卒業二十五周年記念同窓会を来年に控え、準備会を兼ねた総会が六月二十六日午後六時から六華苑で催された。関東・関西からの遠来者を含め、百名余りの参加者で、予想以上の盛況だった。恩師には庄山先生、西野先生、松田先生、松川先生、浜名先生、吉本先生と多勢のご参加を戴き、一同の感激はひとしおであった。

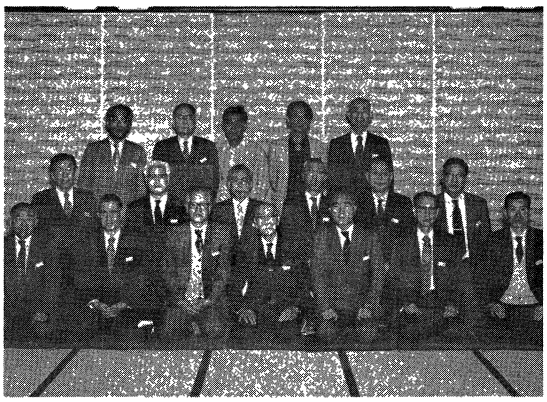
会は小泉泉寿会々長の挨拶にはじまり、西多一泉同窓会事務局長より九十周年を目前にした一泉同窓会の事業報告、つづいて泉寿会々旗の披露説明があって、庄山先生の音頭で乾杯し、懇親会に入った。事務局長の報告を聞きながら、母校の一層の充実と発展を知り、卒業生である名誉を強く感じたことだった。泉寿会々旗は二十五周年を記念して作られたもので、泉丘高校のスクール・カラーである緑色を地に、「泉寿会」の会名と本部名・支部名を白字で抜いた簡素なものである。遠地から参加された関東支部・関西支部の代表者に、それぞれ小泉会長から手渡された。関東支部は毎年一月下旬に例会を開いており、盛会との連絡を受けている。また関西でも、今年末に在住者に呼びかけ、支部を発足させたいとのことである。懇親会は普段の風景だったが、話題としては、恩師を囲んでの二十数年前の思い出話もあり、また最近の社会問題や果ては我が子の進学問題まで多様であったけれど、なんとなく年齢相応の落ちつきを感じさせるものであった。

とにかくこうして二十五周年記念同窓会の準備会兼総会は終了した。幹事一同は、予期以上の盛会を喜び、泉丘同窓会第十回生の結束の固さを確信しました。以後は、来年の二十五周年記念の大同窓会の成功のために準備をすすめていく予定です。

（文責・中山　修）

◇上田コス先生を囲む会

我等が金沢一中時代、厳格なる指導を受けました数学の〝コス先生〟上田豊信先生は、現在富山の砺波工業株式会社社長として、また富山県建設業協会副会長として御活躍中で、一夕コス先生を囲んで歓談したいと計画致し、先生に申し出た処、喜んで御出席との諒解を得ましたので、五七年四月二二日㈭午後五時半から九時まで富山駅前ホテルよし原で開催した処、昭和十二年卒（44期）より昭和十九年卒（50期）の同窓生二十名が集り、一夕コス先生の相変らぬ覇気に一同大いに激励された次第です。



拝啓　昨夜は旧制金沢一中同窓有志の会にご招待頂き、私にとっては全く夢旅の一りでありました。

昭和十年九月一日から十七年三月三十一日まで（三十四才から四十一才まで）七ケ年足らずの間、身心ともに張り切っていた時でありました。

昨夜の会合の皆さんの内、小数の方々には時々会うこともありますが、長く会わない方もあります。

併し数日間に近す内に、過ぎ去った当時の面影が琴鳴として序かんでくるので実に感慨量でした。

金石、高岡の全国相撲大会、それがための応援練習、日出々鶴の砂防堰堤造の勤労奉仕、本多町から新校舎への移転行進には、校旗を先頭にして御真影を奉戴し威風堂々広坂通り片町を行進した感激は忘れません。

登、下校の際に御真影安置所に向って敬礼したこと、厳寒をついて軍隊古に行ったこと、野外教練のこと、今となって懐しいことばかりです。

特に、私個人として終生忘れられないことは、昭和十七年四月上旬のある日、私の送別式が体育館で行われ、私はこの懐しい学校を去ると同時に教育界から身を退くことになるので、私も感極った挨拶をしました。

金沢で出会になった方々に挨拶廻りをして、夕方、予定列車の三十分程前に駅に着きました。その時びっくりした、多数の生徒諸君が駅前広場に迄ってくれ、応援団員を先頭にして校歌、応援歌を歌って送ってもらったことです。この感激は終生忘れられません。

それから何時の間にか満四十年は過ぎ去った。上田コス先生はもうろく爺さんになり、当時の紅顔の少年達は立派な社会人となり、各界に活躍の英姿を見て感慨無に迫るを覚えます。

当夜は立派な御もてなしを受けて、大喜びで弊社富山支店で宿泊しました。翌日は終日何彼の用務を果し、夕方帰宅しました。家族一同（私ども夫婦、息子夫婦、孫二人）夕食の膳につく前に孫の手で昨夜頂いた記念品の蓋を開きました。開いてみてびっくり、実に豪華な重時計で、みんなで大喜び又感謝の至りです。拙宅の客間に置いて長く自慢の種にしたいと思います。

ここに帰宅して深い感慨をこめて厚く御礼申し上げます。コス先生は各位の御厚意は長く忘れません。有り難う　有り難う。

敬具

四月二十三日晩　　上田豊信

◇初めての同期同窓会泉26回生

その二時間半は、あたかも時間が高校時代に逆もどりしたかのようでした。

私達泉丘二十六期生の初めての同期同窓会は、六月五日(土)午後六時三十分より、市内の金沢国際ホテル八階ホールで総出席者百十人を迎え、盛大に開催されました。来賓として、大高現泉丘高校長はじめ、一泉同窓会事務局長西多さん、卒業時に担任をしていただいた永井、浜野、安高、普神、中田、田中、北木の各先生方にご出席いただきました。同期生の中には遠く関東方面からの出席もあり、幹事を引き受けた私達にとって大変うれしいことでした。

同期会は、まず惜しくも天折された浮田、収納両君の冥福を祈る黙とうに始まり、幹事の経過報告を行いました。そして大高校長先生による泉丘高校の現況についてのお話、西多一泉同窓会事務局長からのお祝辞をいただいた後、田中先生の音頭により乾杯を行い、酒宴に入りました。

その後は、卒業以来丸八年以上たった間に積り積った話に花が咲き、あちこちでつきることのない歓談の輪ができました。当時の恋人に会い甘酸っぱい感傷にひたる者、八年ぶりに再会した友人と肩をたたき合う者等々。先生方も教え子達の成長ぶり(!?)に目を細めていらっしゃるようでした。期せずして高校時代の雰囲気がそのままよみがえった感がありました。

また、当日同期生の大砂正明と雅子(旧姓鏑木)さんが結婚式を挙げており、その披露も全員の前で行われ、宴を盛り上げました。

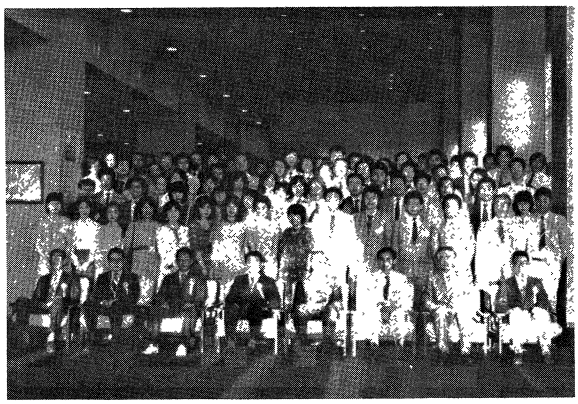
最後に校歌を合唱しましたが、まさしくみんなの心が一つになり、この会のフィナーレを飾るのにふさわしいものでした。

私達幹事は、この同窓会の準備を進めるなかで、全員(九名不詳)の所在地、職業、近況を記載した「学友」という名簿を作成しました。この名簿は、同窓会当日出席者に渡した上、後日、欠席者にも郵送しました。第一回の同期同窓会の記念となるこの名簿が、我が泉丘二十六期、ひいては一泉同窓会発展の一助となれば幸いです。

最後に、この会を開催するに当たり、大変お世話になりました一泉同窓会事務局長西多さん、現泉丘高校長の大高先生をはじめ、皆様に心より御礼を申し上げます。

〝泉丘二十六期バンザイ!〟

(小西了介記)



◇近況集「本多の森」第二揖発刊(一中三十一回)

昨五十六年度の大正十三年会総会が関西在住の幹事の努力で、六甲山大会として盛大に催された。その際近況集「本多の森」第一揖が岩田繁雄氏のお骨折りで刊行され、大いに反響をよび会員に喜こばれた。

そこで今年も是非第二揖をとの要望が多かったので、本年度総会の案内状の出欠回答ハガキの通信欄の記事を着順に整理して「本多の森」第二揖として発行した。

今年度の総会は風薫る五月二十二日、粟津の法師を会場とした。出席者二十三名。生存会員四十八名に対し五十%、上々の出席率で盛況裡に終った。ただ昨年の大会以来、安田徳次、沖野和雄、山田英太郎、瓜生順良の四君が相次ぎ他界されたことは誠に寂しくも悲しいことであり、心からご冥福をお祈りする次第です。然し年々旧友の減ることは残念だが、我々高令者の集いとしては避け難い宿命とでも云わざるを得ないことでしょう。

然し誰しもまだ平均余命があるのだから、大いに長寿を保ち余生を楽しむ工夫をして下さい。各々我々には八十年に近い年輪が肉体に、心に刻み込まれているが、お互い遠い青春時代に溯り、竹馬の友として触れ合うあらゆる感触が本会ならではの味であるから、この十三年会を愛し、自分の健康を大切にし次期大会に出席の意欲を燃やそうではないか。

(村山勝次郎)

日本学士院賞にかがやく柚木学教授

去る六月、日本学士院賞を贈られた柚木学関西学院大教授は旧金沢一中五十四回の卒業生で、旧金沢一高(金沢泉丘第一回生)の卒業生でもある。幕藩体制下の近代、現代海運の成立過程の研究で同賞に選ばれ、授賞式では中曽根首相臨時代理、小川文相があいさつ。また式に先立ち研究について天皇陛下にご説明した。

関東一泉同窓会雑感

東京での一泉同窓会を、今年もまた九段会館で、九月三十日に開くことになりました。

吉野勝太郎先生にお世話戴いていた昔から、九月の声を聞くと、この集まりの案内状が舞込むことになっておりました。暑さもどうやら収まり、受付を手伝って貰う学生さん達の試験もほぼ終り、何かと行事の多い十月に入る一寸前と言うこの時期に、多分これからも行われることでありましょう。

それにしても、此の同窓会支部総会なるものは何と纏めにくいものなのかと、嘆息まじりに準備を始めたのでしたが、出席の返事もぽつぽつ届きはじめ、やはり、伝統ある学び舎のえにしに結ばれて、これから先も集い続けられると言う手応えが感じられてほっとしているところです。

記念行事を機に、久し振りに故郷へ帰って懐しい顔に出遇うと言う程の感激も得られず、渾名を呼び合う同志が集まって騒ぐ同期会のような気安さも無いと言うことなのでしょう、無関心の人があまりにも多いので、二年に一度でもいいのではないかしらと考えたりしましたが、それでは、そうでなくても滞りがちの、「一泉」配布をどうしたら良いかしらなどと思い余った末、とにかく呼びかけを始めることにしました。やがて暑い中を、神奈川、千葉、埼玉と住まいも離ればなれ、先輩から後輩まで年もかなり違う方達が集まって来て下さって、和やかに、しかも積極的に意見を交わす姿を見る事が出来、私が世話役から開放される日も近いと安心したことでした。

昨年、新聞に載った案内を見て、一中中退後、長い間交友が途絶えていた方が喜こんで参加して下さったり、同期の消息を知らない若い方達が連絡して下さったりした事を思い返し乍ら、私自身は、誰のお誘いで何時頃から出席し始めたのだったかしらと、ふと振り返ってみました。

当時会場は海運クラブでした。九十と言うお歳の畠山一清氏が、杖を手に悠然と入っていらっしゃった姿が目に泛びます。集まりは小じんまりとしていて、同期の人が居た記憶も無く、たまたま私の親友の伯父様であった中川善之助氏と隣り合わせになって、英国人と結婚して日本を離れてしまった其の友達の事を話し合ったことなど感慨深く想い出されます。

会場が雅叙園へ移った頃から、吉野先生に呼び出されて案内の宛名書きなどをさせられるようになり、其処でやはり手伝いをしていらっしゃった現会長鏑木政岐先生との御縁が出来るように成りました。

吉野先生ご健在のうちは、皆がお手伝い程度で気楽に参加して居りましたので、先生が急に倒れられると、一泉会の資料一切は開かずのロッカーに眠ったまま、同窓会の開かれない年が続くことに成りました。後任の学生寮々長中村俊貞氏ご着任後、此のロッカーは鍵屋さんの手を借りて開けられ、どう云う訳か、中の物そっくり私の処へ届けられてしまいました。事務的なことの苦手な私ですので、適当と思われる方にお願いしてお渡ししましたのに、雅叙園で再会後、日本青年館、九段会館と、会場も替えて数年経った今、又々我が陋屋へ戻って来ていて、事務所の無い支部の有様をちょっぴり嘆いても居ります。

かねがね、八十になったら後の人に譲りたいと言っていらっしゃった鏑木会長が、とうとう満八十のお誕生日を迎えられてしまいました。後を継いで頂く筈の瓜生副会長は、思いもよらない事でしたが急逝されてしまい、後任には浦茂氏のご内諾を頂くことが出来ましたが、鏑木会長のお元気なご様子と、お人柄を慕うあまり、「ゴルフをなさっている内は……」とか「土光さんよりお若いのですから」とかお引留めする声も高く、もう暫くお願い出来るのでは？と期待し乍ら、いい時に土光氏が活躍して下さったものと思ったりして居ります。又、スポーツで鍛えられた長身は若い人の中へ入ってさえ目立つ程スマートな浦先輩は、私個人としては書家としても尊敬申し上げて居り、大変ご多用の身ながら幹事会にも毎回出席して下さって頼もしいので、吉野先生がお一人でなさっていた運営も漸く組織化して来ようと言うことと相俟って、関東一泉同窓会の将来に明るさを感じ、今は一日も早く私の御役御免を願って、舞い込んだ通知を手に気軽に参加する身になりたいものと思って居ります。　厳霜碑にゆかりの皆様、関東一泉同窓会をどうぞよろしく!!

（松田耀子）

同窓会通信

旧金沢一中寄宿舎「桜寮」二十周年記念誌発見さる

一中寄宿舎「桜寮」の創立二十周年記念誌の小冊子が、この程市内の古本書店にて発見された。発見されたのは金沢工大教授の藤野堯久氏で早速一泉同窓会に寄贈された。

この本の所有者は当時の舎生であった樫田三次氏（明治四十年卒）が所蔵していたものらしく、表紙の余白に自己の所感が隙間のない程に記してある。

旧一中の寄宿舎の創立は明治二十六年十一月五日で、その際の入舎生は僅か五名に過ぎなかったが、爾来年々増加し一時は百名に近い生徒を収容したことがあった。その後漸次減少し大抵五十名内外を収容していた。大正二年にこの桜寮の二十周年を迎えた。それ迄に収容した舎生の総数は六百四十七名を数えた。これ等の舎生は卒業後主として陸海軍に、官庁の公務、或は教職に各自志すところに進んだ。

同記念誌は冠頭に当時の舎監の辻甫、宮本治作、安田松太郎先生を中心に当時在舎の生徒の写真を載せ、校長平山正先生、藤井準夫先生の祝辞があり、卒業生中野貞雄氏（明治十五年卒）、久保清氏（大正二年卒）等の回顧の投稿がつづく。

本文は在舎生の「思叢」と題した生徒の毛利就氏（大正三年卒）池端純一氏（大正四年卒）等十五名、又「詞藻」と題して高橋他計雄氏（大正五年卒）他二十名の生徒が夫々執筆をしている。

全体として当時の若者の抱いた思想をその儘発表し、日露戦争直後の戦勝に酔う軽薄な風潮を嘆き、寄宿舎桜寮にて体得した剛毅不屈の精神で、日本の確固たる大国民思想を建設せよと訴えている。

同窓会では、当時の貴重な資料として保存することとした。

五十七年度 常任委員会が開催される

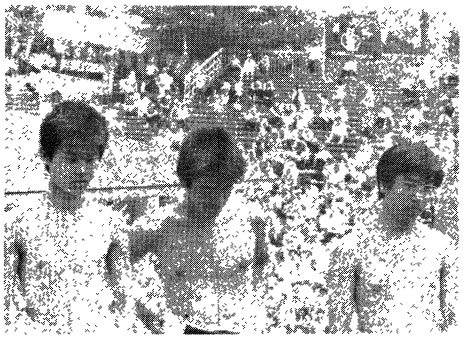
本年度の総会に先立ち去る七月三十一日、母校集会室に於て五十七年度の同窓会常任委員会が開かれた。当日八十二名の委員の出席を得て開会。宮会長より平素よりの協力に対し深く感謝するとの挨拶につづき議案の審議に移る。まず本年度の総会を例年の通り十月十五日とし、金沢ニューグランドホテルを会場に決定。同日挙行される母校厳霜碑の慰霊祭及び総会への多数出席を要望される。

尚、来年度に迎える母校創立九十周年事業については、本校校舎の完成をみる五十九年秋に挙行するか、其の他の記念事業は別途に組織する委員会に凡てを審議することとして決定した。事務局にては近く記念事業委員会を発足して、その準備をなすこととした。

全国高校相撲大会に 母校が66回連続出場

大正四年はじめて金石海浜にて開催された学生相撲大会は、今年は第六十六回高校相撲金沢大会として幕が開かれた。

母校泉丘高校は第一回大会以来の常連として旧一中の伝統を守り、大会の歴史と同じ六十六回連続出場を果した。泉丘校には相撲部はないが「参加することに意義がある」とばかりに伝統を受け継いで三年生でチームを編成した。成績は団体予選で三点を得て辛じて中位となった。監督の垣内謹治教諭も「来年もこの伝統を守り、出場して闘志あふれる土俵を見せたい」と張り切っている。尚、新築なった母校には相撲場がなく、是非つくって欲しいとの要望がある。



左から岩尾、小島、鈴木の三選手

母校優勝の足跡

大5年	第2回	一中	（少年部）
大6年	第3回	一中	（中年部）
大8年	第5回	一中	（第一部）
昭14年	第25回	一中	（少年部）
昭17年	第28回	一中	（少年部）
昭38年	第47回	泉丘	（個人）

関東一泉会の幹事会ひらく

毎年秋に挙行される関東一泉会の総会の幹事会が、近く石川県紀尾井会館に於て催される。副会長として関東一泉同窓会で会員に親しまれ、会の発展に寄与された故瓜生順良氏のあとをうけて浦茂氏（昭二年卒元空幕長）が新任された。今年は九月三十日開催と内定し、その準備をすすめることとなった。世話人として松田耀子、幸村鹿子の両氏があたられる。

市場一泉会通信

この程、市場一泉会では役員会を開き、役員の改選を行うと共に、更に同会の結束をかため親睦を深めることを決議した。

尚、母校の創立九十周年を迎えることもあり、この機会に新らしく名簿を印刷発行した。

役員は次の皆さん。

前会長　成瀬清次（一中四十回）
会　長　柿木義夫（一中四十二回）
副会長　平石英雄（一中四十一回）

泉丘新校舎で入学式

石川県下の高校では、本年四月八日一斉に入学式が行われた。母校泉丘高校では旧講堂が校舎の全面改築のため壊されているので新体育館で入学式。今春より新入生始め生徒は、この程完成したばかりの鉄筋五階建ての校舎で授業が始まる。校舎は今春から取壊しがはじまった正面建物（管理棟）と新講堂の建造が五十八年度の事業となるため、学校側ではこの完成をまって創立九十周年式典を行う予定。

第25回(82才)以前の卒業生の調査

(57.7.25現在)

卒業年次	卒業回数	年令	五十三年の名簿の現存者総数	現在健在を確認した数	五十三年以後判明した死亡者の数	現在の不詳者数	摘要
明治27	1	106				0	全員逝去
28	2	105				0	〃
29	3	104				0	〃
30	4	103				0	〃
31	5	102	3		3	0	〃
32	6	101	12		12	0	〃
33	7	100	11		11	0	〃
34	8	99	24		24	0	〃
35	9	98	17	1	16	0	不詳者なし
36	10	97	27		25	2	健在者なし
37	11	96	29	1	25	3	
38	12	95	29	1	28	0	不詳者なし
39	13	94	24		22	2	
40	14	93	37	1	35	1	
41	15	92	38	4	34	0	不詳者なし
42	16	91	43	1	39	3	
43	17	90	39	8	31	0	不詳者なし
44	18	89	51	16	26	9	
45	19	88	54	9	32	13	
大正2	20	87	26	9	17	0	不詳者なし
3	21	86	41	9	28	4	
4	22	85	35	15	17	3	
5	23	84	33	8	11	14	
6	24	83	30	10	10	10	
7	25	82	59	24	35	0	不詳者なし
			662	117	481	64	

一泉桜美会活動報告

絵の同窓会一泉桜美会の活動報告を致します。

㈠　春季写生会

五月八日より一泊二日間、今春架橋そうそうの能登島大橋を渡り能登島写生を行った。参加者十四名、民宿に泊り清遊した。

㈡　特別例会

七月八日、毎月例会の会場としている清川町犀川画廊が新しく新築したことを祝い、二階メゾンローゼにて記念例会を開催した。参加者二十一名持ちよった作品数十六点。

㈢　第六回小品展

七月二十二日から六日間、金沢市片町北陸電力SSに於て、第六回目の小品展を開催した。会員有志二十三名、油絵は竹沢基、中村秀雄、陶芸の大樋長、書の山川孝、坂野雄一、彫刻の今英雄、写真の英勝雄、本多政一、俳画の南秋草子、他に石田直行、高桑重三、笠島伍朗、粟野利雄、石野竜山、横井衛、などの諸氏の力作が飾られた。

あとがき

春、秋と年に二回宛発行したこの会誌も、こんど第六号として皆様の許にお届けすることが出来ました。

偏えに会員の皆様のご協力の賜と感謝に堪えません。この冊子が母校と皆様との絆を更に深め、会員の活動の様子を知ることによって会員相互の親睦と交流がより活潑になればと念じております。

編集内容等について不備の点も多いことと思います。お気付きの点をお聞かせ願うと共に会員皆様のご自由なご寄稿をお待ち申し上げ、この「一泉」の発行が今後共、長く続くことが出来るようご協力をお願い申し上げます。

尚、各期の催された同窓会等の模様を是非お知らせ下さい。

（事務局　西多記）